

まえがき

学校長 江 森 一 郎

戦後大体10年をめどに変えられてきた学習指導要領は、平成と年号が変わった当初から、幼稚園の教育要領からはじまり、今年度の高校の新学習指導要領の実施により、1サイクルの終わりにさしかかっている。高校の教育内容の変化についていえば、家庭科の男女共習、戦後新教育のシンボリック的存在だった社会がなくなり、地歴・公民の両科となったことなどは、数年前の新聞紙上を賑わせた話題であった。本校でも、昨年度立派な調理室が建てられ、男女共習の家庭科が行われていることなど、附属学校として新指導要領への切り替えが着々と進行していることはもちろんである。

更に本校ではその上に、今年度は次の指導要領改訂に向けた文部省指定の教育研究開発「新教科：国際・文化科の導入を考慮した教育課程の研究」（三年間）の最終年度にあたる。教育学部教授4名を含む6名の運営指導委員会は、これまでと同様に今年度4回開かれる。

本校は、学校行事も盛んで、年間4・5回持たれる特別合同授業をはじめ、年2回のスポーツ大会、運動会、文化教室、開校記念祭、遠足、歌の祭典、などなどが年間計画に組み込まれている。また、今年は、服装の自由化問題をめぐって、土曜日の3・4限を割いて全校集会を行った。賛否両論の意見が、3年生はもちろん、1・2年生にも多出し、生徒の意見の途切れることがなかった。丁度、教育実習の最終日でもあり、実習生にとっても強い印象を与えたようである。

日頃の教科の指導はもちろん、生徒指導の側面も、本校のような学校でも意外と多い。進学指導も3年生の担任になればまことに大変で、翌年となれば、残った浪人生の世話も結構大変である。（自費で東京に出かけ、出身の予備校生に夏休み学習のありかたの指導をする教官もいる。）

世は増税のからみで、行政改革に目が向けられ、学校教育も標的にされるかもしれない。しかし、高校教育現場に限っていえば、比較的恵まれた環境に置かれていると思われる本校のような学校でも、極めて多忙である。内地留学など一度は考えても、断念せざるを得ない現状である。

「ゆとりある教育」は、まず教師自身のゆとりの確保からと、教育行政当局は心掛けてほしい。